

暮らしの中の木材 第4回 木の模様 -木目と空-

木材利用部 藤原健

暮らしの中の木材・木製品を見たとき、様々な木目を目にします。合板や木質ボードで作られたものでも、表面に薄くスライスした木材や木目調の樹脂板を貼り、化粧的効果を上げるために木目を表現することがあります。どうやら、私達の木目に対するこだわりが、大きく関わっているようです。それは、木目はどのようにして現れるのでしょうか？

四季のはっきりした地域の樹木は、成長の旺盛な時期に作られる早材と成長の緩慢な時期に作られる晩材との繰り返しによって年輪をつくるのがよく知られています。通常私たちが目にする木目の多くは、この年輪の境界部分が材面に現れたものです。樹木は、樹皮のすぐ内側にある木部の一番外側に年輪を毎年新たに作ることで太くなっていきます。幹の中で年輪が重なっていく様子は、円錐形のコーンをどんどん重ねていくイメージです(図1)。幹の中で年輪が円錐形であるということがみそで、どの方向で材を取るかで材面に現れる木目が異なってきます。

樹種によっても、現れる木目が異なります。木材を構成する細胞の種類や大きさが樹種によって異なるためです。針葉樹材では、仮道管と呼ばれる細胞の大きさと細胞壁の厚さが1成長期の変化することで年輪ができますが、その変化の仕方が樹種によって異なるために違う木目が現れます。ですから、スギやカラマツのようにはっきりした木目からカヤのようにはっきりしない木目まで様々です。広葉樹では、道管と呼ばれる器官が木目に大きく関わっています。ケヤキやミズナラなどの環孔材では、成長期のはじめに作られた大径の道管の断面が並び木目として現れています。トチノキやカ



図1. 年輪が積み重なる様子

ツラなどの散孔材では、道管が比較的均一に分布するので木目は環孔材ほど目立ちません。木目の度合いは、材の均質性の目安にもなります。碁盤など表面の滑らかさが大切なものには、カヤやカツラなど木目のはっきりしない材を使います。床板や天井板など装飾的な価値を求めるものには、ケヤキやスギなど木目がはっきりしたものをを用いるという使い分けもあります。ところで木材には、ときとして空と呼ばれる特異な模様が現れることがあります(写真1)。玉空、牡丹空、葡萄空、縮緬空、笹空など材面に現れる模様のイメージからそれぞれに名前が付けられています。これらの空材は装飾的な価値が極めて高いとされ、床の間周りの装飾材や伝統木工芸品、天井板等に特殊な用途として珍重されています。この他にも、年輪の構造とは関係のないものもあります。ナラ材に見られる虎斑(とらふ)と呼ばれるものがあります。これは、材面に現れる放射組織があたかも虎の毛皮の模様のように見えることから呼称されていますが、光の具合によって輝くような光沢を示すため銀杏ともいわれています。虎斑はナラ材のまさ目面に普通に見られ、先ほどの空のような希少価値は少ないですが、ナラ材が洋家具や内装材に多用される理由の一つのようです。

木目は同じ樹種であっても、様々な表情を示します。1年間に成長する量も均一ではなく、温度や降水などの生育環境によって年輪の幅が変化し、この年変化が木目にゆらぎを与えています。自然なゆらぎと美しい曲線が木材の持つ魅力の一つかもしれません。



写真1. ケヤキの玉空